研究の現場から

飲酒饗宴図（出土地不明 平山郁夫シルクロード美術館蔵／田辺勝美(編)『平山コレクション　ガンダーラ佛教美術』講談社，2007，Fig. I-54.）

ガンダーラの高級娼婦像をみると東西文化交流がわかる

田辺 理
TANABE Tadashi
第11期 特定准教授（文学研究科）

田辺先生の研究しているガンダーラとはいつの時代の話ですか？どこにあるのですか？

ガンダーラとは、パキスタン北部、ペシャーワル市の周辺地域をいいます。この地域は、多くの外来王朝に征服されました。前４世紀後半にアレクサンダー大王（前336-323）が、ガンダーラを短期間ながら占領した後、ギリシア系のセレウコス朝がこの地を支配しました。そして、前３世紀にはインドのマウリヤ朝の版図となりました。その第三代のアショーカ王（前268-232）の時代に、ガンダーラに仏教が伝播しました。マウリヤ朝の衰退後、前２世紀前半から１世紀、グレコ・バクトリア朝とインド・グリーク朝のギリシア人が統治しました。やがて、中央アジアの遊牧民クシャン族がガンダーラへ進出し、１世紀半ばから後半にかけてガンダーラと北インドを征服して、クシャン朝を樹立しました。そして、カニシカ王の治世において、クシャン朝は全盛期を迎え、ガンダーラでは仏教文化が栄え、各地に仏塔が建立され、多くの仏教彫刻が制作されました。このように、今回刊行の新著で扱うガンダーラの仏教彫刻は１世紀から４世紀に造られたものです。

田辺先生がガンダーラの研究を始めたのはなぜですか？

私は最初からガンダーラの仏教彫刻の研究や美術史研究に興味をもっていたのではなく、東西文化交流史や東西交渉史に関心を寄せていました。ガンダーラの仏教美術は、ギリシアの美術ないし帝政ローマ美術の図像と写実的技法を基盤とし、それにインド仏教美術を加味した東西文化の折衷美術です。そのため、東西文化交流史や東西交渉史の研究には「うってつけ」の美術なのです。

このような折衷美術の研究には、縦軸と横軸をもつ二面的な研究が必要となります。ガンダーラの場合は、縦軸は日本仏教美術の研究と同じく、仏教経典の内容と彫刻の図像とを比較する仏教図像学、彫刻を特徴づける表現の有様を研究する様式史、彫刻の制作年代を決定する編年論よりなります。一方、横軸は東洋と西洋の文化交流が基軸となりますので、地中海世界から西アジア、中央アジアの美術、更にガンダーラの仏教美術が東漸した中国、日本の仏教美術の比較研究からなります。このようにして、地中海世界から日本に至る広大の地域の文化、具体的にいえば「ガンダーラを中心としたシルクロードの文化」を研究できるところが、ガンダーラの仏教彫刻研究の醍醐味なのです。

今回の新刊は、ブッダ（男性）のイメージが強いガンダーラの仏教美術のなかで、女性に注目しているのが特徴とお聞きしています。なぜ女性に注目したのでしょうか？

ガンダーラの仏教彫刻研究の大家であるアルフレッド・フーシェは、その著書において、「ガンダーラの仏教彫刻に表現された女性像は、姿格好が極めて類似しているために、身分差や年齢差が殆ど見られない」と、述べています。つまり、ガンダーラの彫刻家は、女性像を用いる場合には唯一の理想的なモデルを用いて、それに様々な装身具や衣装を使い分けて身分差や年齢差を表現していたと考えられます。そこで、そのモデルとなった女性はどのような女性だったのか？　という疑問が湧き、考察することにしました。ここで、ガンダーラの仏教彫刻がどのようにして成立したのか思い出してください。上述したように、ガンダーラの仏教彫刻は、ギリシアやローマ、インドの美術の影響を受けています。このような前提から、女性像のモデルも、これら三大美術の場合と同じではないかと想定したのです。そしてギリシア、ローマ、インドの美術の女性像について、モデルとなった女性について考

古代インドの都市ヴァイシャーリー在住の高級娼婦のアームラパーリーが釈尊にマンゴー園を寄進している。マンゴーは高級品で、マンゴー園の所有は金持ちの証。
高級娼婦アームラパーリーのマンゴー園の布施（シクリ出土　ラホール中央博物館蔵／パキスタン　ムハンマド・ハミート氏提供）

顎を掴む仕草はギリシアないしは帝政ローマの美術からガンダーラへ伝わってきた表現であり、求愛などを意味する。通常、男性が女性に行うが、本図の場合、娼婦が馴染みの客に行っている。
男性の顎を掴む女性（出土地不明　平山郁夫シルクロード美術館蔵／田辺勝美（編）『平山コレクション ガンダーラ佛教美術』講談社，2007, Fig. I-59.）

察した結果、これらの美術においては、高級娼婦をモデルとして理想的な女性像を制作していたことが判明しました。この結果を踏まえて、ガンダーラの女性像を研究したところ、ガンダーラにおいても高級娼婦をモデルとして、王妃や王女、召使いなどと身分は異なるが、一様に美しい女性像を造形していたという結論にたどり着きました。たかが女性像と思われるかもしれませんが、されど、ガンダーラの女性像は、国際的な文化交流の賜物であるガンダーラの仏教美術の本質を、見事に体現しているのです。

タイトルに「高級娼婦」とありますが、当時、娼婦はいったいどんな存在だったのでしょうか？

古代のインドやガンダーラでは、高級娼婦をサンスクリット語でガニカー（gaṇikā）と呼んでいました。ガニカーは普通の売春婦ではなく、社会的地位の高い女性で、娼婦の中では最高級の存在でした。様々な技芸に精通した最高級の知識人、文化人、芸能人であり、美しい肢体と美貌を兼ね備えた若い娘だったのです。また、仏陀の生涯を記した仏伝によれば、仏教教団へ園林や精舎を寄進する布施は、国王や長者、大商人などが行っていますが、ガニカーの中にもそのような布施を行えるほど裕福な者がいました。ガニカーの客は、富裕で社会的身分も高い王侯貴族や大商人、金貸しなどの金持ちに限定され、そのような男と特定の契約を結んでいました。そのため、そのような男性パトロンから金品を巻き上げることができたガニカーは富裕となったのです。成功したガニカーの中には、大豪邸に住むものや、町のシンボル的存在として、人々に称賛、尊敬され、中には王妃になった者もいました。娼婦の中の最高級のガニカーが、彫刻家や画家のモデルとなったのにはこのような理由があったのです。

本書での目標を教えてください。

本書を出版することによって、今後のガンダーラの仏教彫刻の研究を盛り上げ、ガンダーラ美術の研究者を増やしたいと思っています。ガンダーラの仏教彫刻を扱った書籍はこれまで多数出版されていますが、殆どの研究書が上述した「縦軸」の研究を中心に行われたものであり、「横軸」の研究が少ないのです。このような状況が、ガンダーラ美術研究の地平を萎縮させています。しかし、ガンダーラ美術には仏教という範疇を越える国際性がありますので、新たな分野の研究がまだ可能です。そのため、本書は脚注や参考文献表を載せた研究書の体裁をとっており、ガンダーラ仏教彫刻の研究に少しでも興味関心のある方や、学生に読んでいただきたいと思っています。本書を読むことで、ガンダーラの仏教美術の研究の楽しさを理解し、国際的でグローバルな視野を会得する若き人材が一人でも多く現れてくれれば幸甚です。

著書紹介

ガンダーラの高級娼婦たち

ガンダーラの仏教彫刻に表現された貴婦人像のモデルを求めて

柳原出版／9000円＋税
2022年11月30日刊行予定

本書は娼婦の生態を詳述したものではありません。これまで内外の研究者が取り上げなかったガンダーラの高級娼婦に注目して、仏教美術とシルクロードの東西文化交流を考究した真面目な研究書です。本書を繙けば、新鮮で興味深い知の地平が開けることでしょう。